

室津道

「室と号る所以は、此の泊、風を防ぐこと室の如し。故、因りて名となす」と『播磨国風土記』に記される室津。奈良時代の僧・行基が開いたといわれる撰播五泊の一つで、「室津千軒」と言われたにぎわいを見せました。江戸時代には姫路藩の飛び地となり、参勤交代の宿場町として本陣が6軒もありました。また、朝鮮通信使や琉球使節が江戸参府の途中に寄港し、ドイツの学者であるケンペル(P52)やオランダ商館の医者・シーボルト(P55)なども訪れた国際的な港でした。その室津と姫路を結んだのが室津道。西土井で魚吹八幡神社に向かう北路と、平松を経て興浜、浜田へ向かう南路に分岐します。南路は飾磨津からくる浜街道と網干で合流します。



琉球使節行列図 たつの市教育委員会蔵 (江戸時代)

